生存科学研究ニュース

Vol.5. No.5. 1990. 9 .10発行

内　容

●第52回生存科学研究会
「人間生存の経済学
ーメディコ・エコノミックスへの道ー」
……江見康一…1
●「科学および科学技術と人間」会議
報告書完成……2
●研究誌『生存科学』創刊号発刊……3
●北上川プロジェクト準備会……3
●第1回「生存科学シンポジウム」予報……4
●生存科学研究所福岡講演会のお知らせ……5
●第4回武見国際シンポジウムのお知らせ……5
●第53回生存科学研究会のお知らせ……6
●維持会員だより（会員移動）……6
●平成2年度第3回常務理事会……6
●研究所日報……7

発行：生存科学研究会
〒104 東京都中央区銀座4-5-1
聖書館ビル303
(財)生存科学研究所内
電話 03-563-3518

●第52回生存科学研究会

人間生存の経済学
ーメディコ・エコノミックスへの道ー

帝京大学経済学部教授　江見康一

平成２年７月21日㈯午後２時より、大手町農協ビル会議室において第52回生存科学研究会が開催された。今回は平成２年度の主題「医療・経済・生存」の第１回として、江見康一教授から表記の発表があった。

教授は武見会長が日本医師会にメディコ・エコノミックス研究委員会を作られた時の委員の一人であり、「メディコ・エコノミックスは武見会長が提唱された新しい経済理論だが、メディコの中には生存が入っている」と説明された後、以下のように講演された。

＊　＊　＊　＊

東欧の変化から、計画経済と市場経済の優劣に決着がついたと言われ、「市場経済」とか「競争原理」とかいう言葉がサミットでも盛んに出てくる時代となった。経済学の200年の歴史を振り返ってみると、1873年と1973年との２つの分水嶺がある。アダム・スミスの国富論に始まる1776年からの自由主義の時代が、1873年のウイーンの恐慌を一つの分水嶺として、その後社会の責任を重視した時代へと変わり、そして1973年の石油ショックという第２の分水嶺を迎えた。それ以降の現象を経済学は説明していないと言われる。多元社会、グローバリズムのなかで、その理論体系はまだ作られていない。

第１の分水嶺までには、アダム・スミスの道徳情操論を基盤とした国富論、マルサスの人口論、リカードの恐慌論、ミルの生産の法則・分配の法則等がでた。その後第２の分水嶺までには、ビスマルクによる社会保障、マルクスの資本論がで、またケインズによる生産ー分配ー支出という考え方から有効需要の創出が不況対策として成功した。しかしそれはインフレ対策としては弱く、石油ショックに始まる資源問題から、「政府が進歩を意味する」という時代は終わった。

それまでは成長の条件をあまり吟味していなかった。農業社会から工業社会に移り、人口は3.5倍に増えた。その間GNPは100倍にも成長したが、その成長は今や環境・資源の天井で制約されることになった。公害問題も環境問題も成長の制約条件である。しかもその成長が人間の福祉をそれほど増したかどうかには疑問がある。

これまでの工業化社会に妥当した経済学ではなく、これからは資源・環境を内生化して考えなければならない。武見会長が第２の分水嶺の以前から主張されていた「福祉立地論」「地球経済と環境科学」「医療資源の開発と配分」「メディコ・エコノミックス」「ライフサイエンス」「バイオエシックス」等の理論を、今集大成する必要がある。我々は人間の生存を保障する成長率を捜し出さなければならない。

＊　＊　＊　＊

発表後の討論では、マルクス理論の問題点、発展途上国の経済問題等が論ぜられ、これまでの経済が非市場経済を無視してきたこと、経済は環境・資源の他に心の問題を無視できなくなってきたこと、GNPに含まれないものも考える必要があること等が指摘された。さらに現在の医療の現場における悩みに、経済

学が何等かの支援の努力をする必要があることも強調された。最後に演者は「中成長、中福祉、中負担、高自由」を目標と考えると結んだ。

「科学および科学技術と人間」会議 報告書完成

生存科学研究所が昭和60年より３年間にわたり開催した「科学および科学技術と人間」の会議の報告書が今回完成し、既に研究所維持会員等関係者への配布を終えた。

この会議は科学技術庁の援助を得て行われたもので、以下のような問題意識から出発している。すなわちそれは、「科学および科学技術の進歩は、高度な社会文明を実現させて、高度な社会生活と経済活動に結び付くものとしてその発展に拍車を掛け、自動的に加速されるという事態が生じつつあり、その将来を誰も予測することはできない時代になった。科学技術によってもたらされる問題は広く人類の将来の問題とも関連しており、科学技術の発展に伴う人間の問題は、深く考えなければならない現状にあるといえる。」というものである。

＊　＊　＊　＊

この会議のメンバーは、
岡本道雄座長はじめ、井深　大、碧海純一、江橋節郎、大江精三、大谷藤郎、杉村　隆、玉城康四郎、三浦朱門、柳瀬睦男、渡辺　慧（向山定孝、途中より参加）の諸氏ならびに世話人代表藤井隆副理事長（当時）で、またその事務や資料収拾・調査のための組織として青木清常務理事他のメンバーが協力している。

会議は計10回開催されたが、報告書にはその各回の要約と、その中から以下の８つの報告と一部の討論が収録されている。

「生命の尊厳」	渡辺　慧
「科学と人間の相克」	渡辺　慧
「現代における科学技術」	碧海純一
「生命の特異性と科学」	柳瀬睦男
「科学伝達物質について」	江橋節郎
「公害問題」	向山定孝
「科学技術文明と教育Ⅰ」	岡本道雄
「科学技術文明と教育Ⅱ」	岡本道雄

＊　＊　＊　＊

なお、この報告書は当面生存科学研究所・基金関係者のみに配布されているので、配布されていない方で入手ご希望の方は研究所までお申し越し下さい。

研究誌『生存科学』創刊号発刊

配本希望者は維持会員の申込みをして下さい

生存科学に関連する幅広い研究成果を発表する研究誌『生存科学』の創刊号が発刊になりました。生存科学研究会会員（研究所維持会員）はじめ研究所に直接関係のある方々へは既に配本済みであります。編集委員会で協議の結果、この「生存科学研究ニュース」をお届けしてきた方々でも、関連分野の研究所、大学の教室、図書館等、当方から謹呈する場合を除き、上記に該当されない方へは原則として無料配布をしないことになりました。

上記に該当されない方で配本ご希望の方は、生存科学研究所維持会員になっていただく必要があります。この際是非、ニュースに同封しました「研究誌『生存科学』配本申込み書」用の葉書で維持会員加入の申込みをしてください。

維持会員制度は研究所の活動にとって発展的再生産のエネルギー源ともなるべきものであり、維持会員の会費（継続寄付）は研究事業の拡充、より一層の社会貢献のための貴重な財源となります。

研究所は維持会員へ、研究誌の配本の他、研究所の研究成果・資料の配布、研究所が開催する講演会・シンポジウム等のご案内、受託研究の応需、研究者・講師の派遣またはご紹介等の活動を致しています。

＊　＊　＊　＊

維持会員会費は

個人：年間一口２万円

法人：年間一口10万円（原則として３口以上）

＊　＊　＊　＊

なお研究誌のみの購入という方法は、原則としてはありませんが、研究所の判断で実費で交付する場合もありますので、研究誌のみの入手を希望される方はその旨を研究所へご連絡ください。

（その際の代価は一冊2,500円です。）

＊　＊　＊　＊

研究誌『生存科学』発行にともない、この「生存科学研究ニュース」も近々更に軽量化し、速報性を高めるつもりです。またそれにともない、ニュースの配布先も研究会会員（維持会員）に絞らせていただくことになりますのでご了承ください。

北上川プロジェクト準備会

７月14日㈯午後２時より、北上川研究プロジェクト第４回準備会が開催された。この研究会には研究者の他、関係官庁の職員も研究のため毎回参加している。

今回は㈶全国農業構造改善協会指導部長橋本五郎氏と、㈶冨民協会の溝田博史氏を招いて日本農業の現状と問題点を伺い、それを起点としてその将来について討議を行った。

橋本氏は、永年熱心に取り組んできた農村生活活性化農業構造改善事業の概要と、各地、各時代の在り様、氏が目指している農業組織化への取組とそこに見られる問題点等を詳細

に説明され、農地の所有と利用の分離についての理解が重要であることを指摘し、また、農業改善に最も大切なのは結局教育論であると主張した。

溝田氏は、農業基本法は経済成長と軌を一にし、今日もその目標を超えていないことを指摘、農業についての夢が全く無くなったと強調した。そして、言葉で表現するのはむずかしいが、農業にも金ばかりでなく義理人情で動く部分が必要であると主張し、今見直されはじめている木炭の持つ価値や羊を飼うことの価値について述べた。

第５回は８月18日(土)に森林と林業を中心に特に条件不利地域の話を聞きながら、北上川プロジェクト研究の進め方を煮詰めていく。

第１回『生存科学シンポジウム』予報

既に本ニュースVol.５.No.３.（５月号）の基金運営委員会記事中で触れている『生存科学シンポジウム』が、愈々平成３年１月に行われることに決まった。

このシンポジウムは、生存科学研究の組織全体で進めるものであり、予算措置は基金で既に決定されているが、研究所の常務理事会で承認を得、具体的に細部を決定するべく準備に入った。

執行部では、嘗ての医学特別分科会・ライフサイエンス学会の延長線上に位置付けできるようなシンポジウムにするべく努力しており、生存科学の学術総会として、隔月の研究会例会とともに、生存科学研究を強力に推進し集大成する場となすべく準備が進められる。

まだ決定ではなく暫定的な試案の段階であるが、現在予定されている計画は

日時：平成３年１月20日(日)
　　午前10時から午後５時30分迄

場所：上智大学講堂・図書館会議室

午前は、生存科学に関わる精神的側面と科学的側面から基調講演２題を、生存研の顧問の先生方にお願いする予定。

午後は、会場を分けて生存の哲理、医薬問題、産業環境と健康、医療と経済等の分科会を開き、最後に全体を持ち寄って総合討論を行う予定。

午後のセッションは維持会員諸兄の研究発表を中心に討論する予定なので、奮ってご参加下さい。

生存科学研究所福岡講演会『激動下の産業社会における地域住民の健康のあり方（仮題）』のお知らせ

7月11日、研究所専務理事および常務理事2名が福岡県医師会に県医師会桜井会長を訪問、協議の結果、かねての懸案であった福岡県における生存科学研究所の講演会を10月28日(日)に、県医師会の協力を得て、福岡県医師会の講堂で開催することが決定された。

直前に福岡県で桜井医師会長を会頭として開催されたプライマリー・ケア学会では、桜井会長がコメディカルに広く呼び掛けて参加を求めており、プライマリー・ケアのチームづくりへの意欲を示されていたが、今回の生存科学研究所講演会へもコメディカルの参加を呼び掛けていただくことになった。

講演会へは、福岡県内の医師会、コメディカル、産業関係者、関連する行政の職員等は勿論、県外の維持会員はじめ関心のある方々へ参加を呼び掛けることになっている。特に宗像市、北九州市、大牟田市等、これまで研究所と関わりのある、または足がかりのある地域の方々の積極的な参加が期待される。

研究所としては、昨年の市原市での研究成果を生かしながら、さらに、高齢化の下での環境問題を抱えた産業化社会と地域医療という命題から、プライマリー・ケアの組織化・活性化への取り組み方を探る講演会にしたいと考えている。

ご都合のつく方は是非ご参加下さい。

第4回武見国際シンポジウムのお知らせ

生存科学研究所設立以来、研究所がハーバード大学公衆衛生大学院武見プログラムとの共催で、2年毎に交互に日本とアメリカで開催してきた武見国際シンポジウムの第4回目が、9月29日より10月1日迄の3日間ボストンのハーバード大学で開催される。

今回は産業医科大学が共催者として全面的に協力している。

シンポジウムの主題は、

「労働人口と健康　－その問題点と政策－」

で、以下の3つの分科会が設けられる。

(1) 発展途上国における主な産業医学の問題についての再検討

(2) 産業医学政策の現状と分析

(3) 急速な工業化という視点から見た途上国における産業医学政策と実践のための適切な戦略の検討

日本からは基金副運営委員長の産業医科大学土屋学長、財団の小平専務理事、青木常務理事等が訪米、シンポジウムに参加し、あわせて2年後日本で行う第5回武見国際シンポジウムの準備、研究所とハーバード大学との将来の協力体制等について協議をする予定。

第53回生存科学研究会のお知らせ

平成２年度年間テーマ
「医療・経済・生存」シリーズ　第２回
日時　平成２年９月22日(土)　午後２時～５時
場所　大手町　経団連会館
演題　「人類生存の方法論
としての『環境倫理学』」
講師　千葉大学文学部
加藤　尚武教授

（今回は連休を避けるため第４土曜日になりました。）

維持会員・会員だより

維持会員異動・寄付のご紹介
（平成２年度６月１日～７月31日）

入　会

・個人

比企　能樹　　北里大学東病院消化器疾患治療センター長
土方　正夫　　早稲田大学社会科学部教授
辛島恵美子　　(財)生存科学研究所研究員

・法人

東京電力株式会社
古河電気工業株式会社
三井東圧化学株式会社

退　会

・法人

三井観光開発株式会社

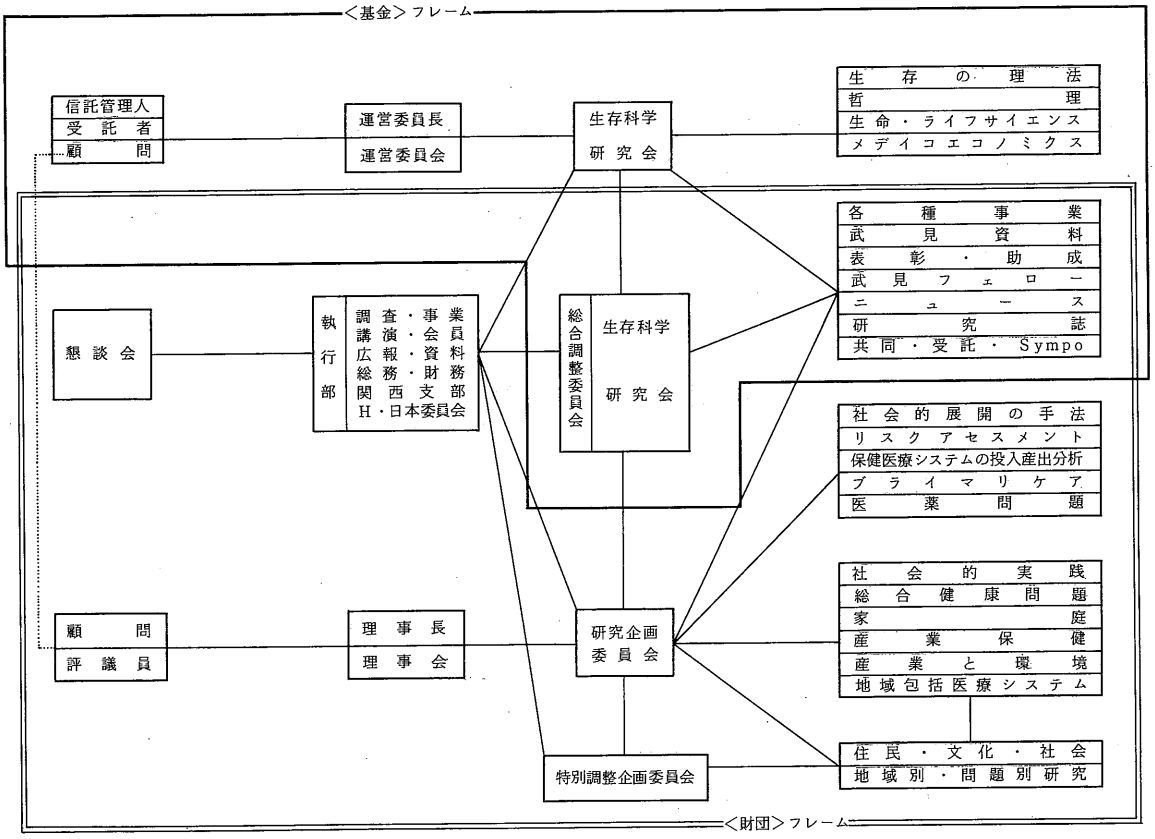
平成２年度第３回常務理事会

７月21日(土)午前11時より、研究所会議室において、熊谷理事長出席のもと、第３回常務理事会が開催された。

会議では、研究活動に関して、社会展開の手法にかかわるプライマリー・ケアその他の研究委員会について、社会実践にかかわる総合健康問題、産業保健、産業・環境、地域包括医療システムその他の研究委員会について、さらに福岡講演会について等の近況・現状報告と討議が行られ、その推進につき協議された。また事業に関しては、W.Leontief氏から財団への図書の贈与の手続きの進捗について、ハーバード大学との協同研究、武見フェロー・ネットワーク、ボストンならびに東京シンポジウム、武見プログラムへの例年の支援について、研究誌の創刊号発刊の報告と今後の運営について、研究所案内の改定について、各種研究委員会の構成について、等々が協議された。

改定された研究所案内に掲載されている基金・財団による「生存科学研究組織運営概念図」は以下のとおり。

組織運営概念図



なお、基金・財団に関わる「総合調整委員会」のメンバーは以下のとおり。(敬称略)

委員長：熊谷　洋

委　員：青木　清、梅園　忠、江見康一、小平　敦、鈴木雪夫、田村貞雄、筑井甚吉、土屋健三郎、中山昌作、藤川正信、藤野志朗、山口正民

客　員：武見家代表　　武見英子

研究所日報

6月21日	第5回武見国際シンポジウム準備会
7月14日	研究誌「生存科学」編集委員会
同	北上川プロジェクト準備会
7月21日	第3回常務理事会
同	第52回生存科学研究会
8月18日	北上川プロジェクト準備会
8月23日	研究企画委員会
同	総合調整委員会
8月30日	家庭問題研究委員会（第1回）
8月31日	医薬問題研究委員会（第1回）